

## 『2020 年度学生生活実態調査報告書』刊行にあたって

本書は、学生センターが実施している「学生生活実態調査」の2020年度報告書です。

2月下旬頃より深刻化した新型コロナウイルス感染症の拡大のため、今回の学生生活実態調査はこれまでとはやや質の異なるものとなりました。

本学では3月から構内での課外活動は原則として停止され、卒業式も中止となりました。4月には入学式、ガイダンス、健康診断、新入生歓迎会がいずれも中止になり、さらに政府の緊急事態宣言を受けて授業のオンライン化が決定され、入構も厳しく制限されることになりました。5月末に緊急事態宣言が解除され、6月下旬に一部の対面授業が再開されましたが、二週間後には感染拡大の第二波の始まりによりオンライン授業のみに戻され、春学期は終了となりました。

これだけ長期にわたって入構を制限することは、東日本大震災の時にもなかったことで、これまで全く経験のないものでした。そのため、あとから振り返れば、「混乱」と認めざるを得ないようなこともあったのではないかと思います。それは国や自治体ですら同様でしたので、致し方ないことだったのではないかと思います。

そうは言っても、学生の皆さんの生活に及ぼした影響は甚大なものであり、この間、失われたもの、損なわれたものの大きさを考えると、残念な気持ち、悲しい気持ちとともに大きな悔しさを感じざるを得ません。

今回の学生生活実態調査では、このような事態を受けて特別に新たな項目を設けました。本調査の報告書が完成する頃には、秋学期ももう終わりかけているでしょうが、新型コロナウイルス感染症をめぐる問題の収束はまだしばらく先になりそうですので、来年度のことを考えるうえでも大きな参考になるのではないかと思います。

これまで学生生活実態調査は経年変化を追うことに重きが置かれていた感がありましたが、今年度に関しては、新しい事態の出現とそれへの対応に対する声を集めるという点で、即効性を持つものとなりました。このことは調査の対象である学生の皆さんの心理にも多分に影響を与えていると思われ、回答者数が昨年度の2574人から3685人へと大きく増加していることがそれを如実に物語っています。

また、残念ながら、新しいウイルスの出現や未知の感染症の流行は、人間の力で完全に制御できるものではなく、生じた事態に対応するしかありません。しかし、グローバル化が進む現在の世界では、パンデミックは10～15年に一度くらいのペースで発生しても不思議ではありません。次のパンデミックに備えるためにも、我々は今回の事態から有効な知見を得ておかなければなりません。

一方、大学の授業のオンライン化については少し前から真剣に議論が進められていましたが、インフラの問題に加えて、学生側と教員側の両方に受け入れる素地がなかったために、実現は遠いものと思われていました。それが今回の事態を機に一気に流れが変わってしまい、大学教育の在り方が本質的なところから変えられていくことになると思われます。そのためにも、今回の調査の結果は大きな意味を持ってきます。

しかし、どんなに授業がオンライン化されても、大学には変わらない価値があります。それは人と人が出会い、交流し、成長していく場であるということです。今回の新型コロナウイルスへの対応で失われることになった最も大きなものは、この人と人の生の繋がりがなかったのではないかと思います。「人が人と会ってはならない」というのは、人という存在の本質を否定するものであり、人道に反するものと言わざるを得ません。それはどんなに通信技術が発展しても、克服できるものではありません。

今回の調査においても、「現在の学生生活の上で、特に不安に感じていること」(Q15) についての回答の第1位は「友人に会えない、または新たな友人ができないこと」(61.5%) でした。これは「コロナウイルス感染の不安」の45.7%を大きく引き離しています。

また、この間、個人的に話す機会をもった学生の皆さんには必ずメンタル面での影響について聞いてきましたが、すべての学生さんが「無気力感」や「抑うつ感」に近い感覚を感じた時期があると話してくれました。ただ、どの学生も明確な自覚はなく、会話を通じてようやく自分の心の状態に気付いていた感じでしたので、メンタル的な影響は統計上の数字(Q11)以上に深く広いものになっているのではないかと思います。

今回の調査で驚いたのは「この春学期中にどこで過ごしましたか」(Q4-1)という問いに対し、自宅外生の43.8% (1年生でも31.7%) が「ずっと自宅外」と回答していることでした。私が話をした学生のなかにも「一人暮らしのため、半年ちかくずっと人と話をしてなかった」という学生が少なからずおり、孤立感や閉塞感の大きさは予想していましたが、これほど孤立して暮らしていた学生がいたのだと初めて分かりました。

この間の孤立感、閉塞感がメンタルに与える影響については、教職員全ての最も心配するところでもありましたので、学生センターとしても新入生歓迎会や大学祭はぜひ対面で実施したいと思ってきました。新入生歓迎会については9月に市ヶ谷と多摩で対面式で実施することができ、大学祭については多摩ではオンライン開催となりましたが、市ヶ谷と小金井では11月上旬に対面式で実施することができました。大学祭についての調査は間に合いませんでしたが、新入生歓迎会については、回答してくれた1年生のうち25.2%が参加してくれたとのことで(Q37)、「キャンパスの雰囲気味わった(53.8%)」「法政の知人・友人ができた(39.4%)」との回答(Q37-1)もいただき、少しは新入生の皆さんのために役立ったのではないかと安心しました。

以上、簡単な感想を述べましたが、本調査の分析については、昨年度、一昨年度に続き市ヶ谷副学生センター長の齋藤嘉孝先生(キャリアデザイン学部)にお願いしました。分析の詳細につきましては、齋藤先生による「調査結果に関する報告」をお読みいただければと思います。

今年度は特異な年になってしまい、本調査もこれまでとはやや趣を異にするものになってしまいましたが、今後もこの調査が継続され、学生の皆さんのお役に立てることを願ってやみません。

2020年12月  
学生センター長 齋藤 勝